

勇気と希望を与えてくれた三人の同志社人

神谷 雄績	同志社大学政策学部嘱託講師
講師紹介〔かみや・たけのり〕	

一九六〇年代から七〇年代の同志社

みなさん、こんにちは。

神谷と申します。今年の四月から文学部と政策学部で非常勤の教員をしていますけれど、三月末までは四十年間ほど、同志社大学の職員でした。

職員として従事した業務（もちろん職員ですから、五、六年に一度は異動があり、合わせて十年ほど、管理部門で働いた経験がありますけれど）は、おもに、学生支援部門と広報で三十年ほど仕事をさせていただきました。そのなかでも単一職場としては、広報課とキャリアセンター（三年前までは「就職部」という名称でした）の二カ所が、特に長かったわけです。両方とも学生諸君や卒業生と接することが多い仕事ですから、たくさんの同志社人と出会いました。おそらく、学生や卒業生から、かなり内面的な、あるいは個人的な話までお聞かせいただけたという意味では、歴代の職員の中でもずばぬけて多くの経験をさせてもらったと思っています。

「同志社スピリット・ウィーク」でお話しさせていただくのは、今回で二度目です。この前は「同志社のDNA」という題でしたが、今日はその続篇のようなものですが、おもに、私が出会った同志社人のなかで、特に若い時代の私に勇気と希望を与えてくださった三人の先輩の話をご紹介しますと思います。「キャリア論」が私の専門分野ですから、どうしても仕事のこととか、生き方とか、夢とかということになると思いますが、私の経験談がみなさんの心のなかに、同志社との出会いを促すような触媒作用をおこすことになればと思います。

はじめにお断りしておきますが、三人の先輩をご紹介します前に、なぜそのような人びとに出会ったかということについて、これは前提として重要ですから、ちょっと長くなりますが触れたいと思います。

私が多くの卒業生に会い、卒業生を通してたくさんの「同志社体験」をさせてもらうようになったそもそものきっかけは、一九七〇年の半ばに広報係長というポストに就いて、『同志社大学通信』（今の『OnePurpose』です）の「同志社人訪問」シリーズを企画したことです。

みなさん「広報」というと、どういうイメージをおもちになるでしょうか。若い人びとは、ちょっと華やかな印象をもっているらしいですね。というのは、「学生の就職したい職種」アンケートなどでは、広報は必ず上位に入ります。広報・国際・企画の三つを総称して「人気三K職種」などと呼んだりします。一昔前には三Kというと、「きつい・汚い・危険」を指す言葉でしたから、言葉も時代とともに変化するというわけです。

そこで広報ですが、今では企業なり官庁なり、たいいてい組織が広報機能を持って、組織の考えをその構成員に、あるいは社会に向けて積極的に発信する、あるいは開示するようになりました。結果として、新聞記者などは取材しやすくなった反面、それに乗りかかりすぎる傾向も出てきました。サリン事件で無実の人を犯人にしてしまったのも、警察発表にマスコミが安易に乗ってしまったからです。取材の欠如ですね。「発表ジャーナリズム」などと言われることもあります。昔の記者には、自分の目で問題の核心に迫ろうという「ジャーナリスト魂」みたいなものがあつたような気がしますけれど。

私が広報をやりはじめた時代は、企業の宣伝活動（「宣伝」と「広報」は同じではないことは知っておいてください）は盛んでしたが、広報活動は今ほどではありませんでした。正確に言えば、日本の企業や大学にも広報の大事さがようやくわかりはじめた時期だったと言っていいかと思います。もちろんその当時はまだ、日本社会一般に「開示」とか「説明責任」という認識は希薄でしたから、「ディスクローズ」とか、「アカウンタビリティ」などという外来語もまだ一般的ではありませんでした。危機管理の意識も高くはなかった。したがって、目先の利く企業や特定の私立大学以外は、それほど広報活動に熱心ではありませんでした。

日本の大学で広報が意識されはじめたのは、大学紛争がきっかけだといっていいでしょう。もちろんそれは私立大学においてであって、国立大学は国がバックについて（「親方日の丸」なんてことを言いますか）経営のことなど考える必要がありませんでしたから、ごく最近まで、つまり国立大学法人になるまでは、広報活動にはあまり関心がなかったと言っていいでしょう。

広報の役割は、たとえば同志社大学とはこういう大学であるとか、こういう考えでこういうことを進めようとしているといったことを同志社大学の構成員（おもに教職員と学生ですが、最近では卒業生も構成員と見なすこともめずらしくなりました）や社会に知ってもらう、あるいは理解してもらうのがおもな仕事です。積極的に記者会見などを開くのもそういう理由です。これは組織の中心から外に向けての働きかけです。しかしその反対のベクトルも重要な任務になります。つまり社会が同志社大学に何を期待しているか、あるいは要望しているか。外側から同志社に向かって意識の流れですね。それを受信、あるいは察知して内部にフィードバックする任務です。受信感度が高くないといけません。これを「広聴」といいます。だから英語でいうパブリシティーだけではなく、パブリックリレーションズも重要なのですね。

本学でも大学紛争をきっかけに、広報活動が意識されはじめました。一九六〇年代の後半です。もちろんみなさんはまだ生まれていっしょらない。

アメリカでは、一九六〇年代にベトナム戦争に対する大規模な反戦運動が若者を中心に巻き起こっていたのですが、六〇年代後半には、アメリカだけでなくヨーロッパでも日本でも、要するに世界中で、古い社会体制に若者がNOを突きつけ、旧体制と衝突しました。中国でも「文化大革命」がありました（このころ、世界の若者の思想的支柱は、マルクス、毛沢東、マルクーゼの、いわゆる「三M」と言われ、わたしも三人の著書をよく読みました）。それらが最も激しかったのが一九六九年前後で、カリフォルニア大学で、学生のデモ隊に州兵が発砲して、何人かの死者が出たりしたのもそのころです。

六〇年代後半の日本の学生運動（五〇年代後半に日米安保条約反対の大規模な学生運動がありましたが、これは長くなるので省きます）は、世界の学生運動と呼応したことは事実ですが、一種の「甘え」を内包した、日本独特な面も持っていたような気がします。どちらかと言うと、具体的改革を目指すというより、一種のアンアーキズムやニヒリズムから来る情緒性、あるいは破壊主義的な面もありました。運動の方向は「日帝打倒」、つまり日本の国家システム打倒を目指したのですが、同時に自分たちの属する大学というシステムも標的でした。それは、「大学の中で管理されていること、管理されるのに甘んじていれば自動的にわが身が支配階級のそばに運ばれていくことが心底たえがたいと思った時に出てきた、日常性を拒絶する運動だった」（津村喬『異化する身体経験』）というように、「エリート」とされている自分自身への否定も含んでいたのです。先に言いましたように、壊したものの後に何をやるかと考えるより、「主体が変わることを通じて世界を変えよう」とした面が強かったような気がします。

これらの運動が特に激しかったのが東京と京都でしたから、同志社も京大も立命館も、大荒れの状況でした。祇園石段下や百万遍などでは学生と警察機動隊が衝突して、辺りが火炎瓶で火の海になるようなこともしばしばで、本学でも、今出川から学生会館（今の「寒梅館」）前までの烏丸通が、学生と機動隊の「戦場」でした。

それでは本学の学生が同志社大学に対して何を問題にしたかという、それ以前に本学独自の学生運動として、学寮に学生自治を確立しようという動きが続いていましたが、大学紛争へのきっかけは学長選挙のやり方を問題視したのが導火線でした。一九六八年だったのでしょうか。それから大学の意思決定のあり方、教授会のあり方、授業のやり方や試験という制度、教員と学生との関係、教員個々人の「大学立法」への対応、などを問う運動へと拡大されていきました。要するに、今まで普通であると考えられてきたことすべてに、疑問と拒否を突きつけたわけです。そうして毎日のように授業に「乱入」したり、学内のあちこちで先生方をつかまえて「糾弾」することが常態化しました。そのころ中国で起こった「文化大革命」の影響もあり、先生方や教授会を「糾弾」して「自己批判書」を書かせるということも頻繁に起こりました。書かれたものの中には、「体制内において以前の犯罪的授業及び試験を行ってきたことを総括し、以後一切の授業・試験を行わないことを約束します」というような教授会の「確約書」も残っています。今日は大学紛争に対してのわたしの見解は差し控えるとして、まあこういう圧倒的な学生のエネルギー、その中にはある種の「暴力」が含まれていたことは確かですが、そういうものを前にして、大学人の「知性」が無効であることを目の当たりにして少なからざるショックを受けた出来事でした。

それと前後して、学内の各門は学生によってバリケード封鎖され、中に入れない状態になりました。寧静館などは、学生が教室のコンクリートの床に大穴をあけ、四階から下が見えたり（コンクリートは砕かれて、明徳館の屋上などから警察機動隊に投げつけるための武器にされたのですが）。当然、学内の機能は麻痺します。事務室も市内のあちこちのビルを借りて分散せざるを得ない。正式な学長も選出できないので、規定によって学部長の中から最年長者が学長代行になるのですが、これが過労などのため、次々に交代するような状態です。今のみなさんには想像もつかないでしょうが、警察権力でそれらの学生を排除するまでの一年間くらいは、パニックのような状態が続きました。

当然、情報は錯綜します。大学評議会（これも外部のホテルの会議室を借りたりするわけですが）の決定事項を教職員に伝達することさえ困難を伴いました。もちろん、自宅待機の学生諸君に対してはなおさらです。そういうことでしたから、情報を集め、一元化し、それを教職員や学生にすばやく発信する必要に迫られたのです。

ということで急遽、総務部の庶務課に広報の機能を持たせたのですが、庶務課もてんでこ舞いでそんな余裕はありません。やはり専門的なセクションをつくらなければうまくいかないということで、広報委員会のもとに広報係を独立させたのです。

当時の「同志社大学広報」を見ますと、公的な決定事項や告示が掲載されていることは当然ですが、それ以外にも、ともかくありとあらゆる情報が生のままで羅列されています。学生のビラや看板の文章に始まり、教授会や学部独自の各種宣言まで、ともかく党派を問わず右も左も、何でも掲載されていて、これはこれで、ある種の迫力があります。疾風怒濤の時代の証言として、貴重だと思います。これは当時の広報委員会が「編集権の独立」を掲げて、広報を必ずしも大学執行部の道具とは考えなかった、つまり権力側からだけの視点で広報することを避けた結果ですが、今日はそれがテーマではありませんので、広報の根本問題は省きます。

私が広報係長に任命された時代は、特に学寮問題を中心に大学紛争の後遺症がまだくすぐってはいましたが、大学がやや落ち着きを取り戻しつつあった時期でした。

組織はできたのですが、広報係といっても、予算は少ないし、担当者も係長一人、係員一人、アルバイト職員一人の、今では考えられないような脆弱な組織で、企画も取材もインタビューもカメラマンも記事作成も誌面のレイアウトも、何もかも手作りでやらなければなりませんでした。今のように編集プロダクションに委託するということなど考えもしなかった時代です。第一、社会的に広報活動が一般的ではなかった時代でしたから、そういう編集プロダクションもほとんど存在しなかった。もちろん今のようにパソコンなんてありませんから、すべてが原始的なアナログの世界です。

ただし、「同志社大学広報」とか「同志社大学通信」とか、今も続いている刊行物はすでに前任者の努力で発刊していました。しかし私は、それはちょっと硬すぎるように感じましたので、これを何とか学生も楽しめるものに変えたいと思いました。

同志社人訪問

ここから今日のテーマに沿うわけですが、そのときに私が何とかしたいと思ったことは、大学紛争でバラバラになった、あるいは学生が批判的にとらえた同志社大学のイメージを、どのような形で回復させ学生諸君に理解してもらうか、あるいは帰属意識や愛校心をもってもらうか、もっと言えば同志社人としての自信を持ってもらうかということでした。学生だけではなく同志社全体に何とか勇気と呼びもどしたいとも考えました。

ここでちょっとつけ加えておきますと、不思議なことは、あれだけ大学のあらゆるものにNOを突きつけた学生たちが、新島先生については表だって批判しなかったことです。いろいろなものは壊されたけれども、同志社の核である新島精神は傷をつけられなかった。もちろん、何人かの学生が新島批判を試みたことは知っていますが、それでもあの「無頼な」学生たちが、結局は表だって新島批判を避けました。二十年ほどたって、その当時の学生リーダーの一人にその理由を尋ねると、「ぼくたちも悩んだけど、熊本バンドの学生たちと同じように、口では新島先生に批判的なことを言ったりしたことがあったとしても、やっぱりぼくらも人間としての、あるいは教育者としての新島先生を畏敬していたんですよ」という答えが返ってきました。

先鋭的な学生諸君は、彼なりに、同志社と新島襄について一生懸命に考えたことは事実でしょうね。しかし、全体的な一般学生がそこまで考えていたかというそうではないでしょう。紛争当時から今日まで、卒業式や入学式（これらが挙行できなかった年もあったわけですが）での学長や総長のスピーチは、これは定番としての、新島先生の話でして、今もこれは変わりません。私立大学ですからそれは必要なことでしょけれども、学園紛争後、ごく普通の学生に聞いてみると、新島先生についての話は自分に関係のない、雲の上の聖人の話だと言うのです。つまり、自分たちとかけ離れすぎていると。

これは大学としても考えないといけないことです。そこでもう少し、学生に近いところに引き寄せて、学生の同志社理解、あるいは新島理解を促せないかと考えました。考えてみると、まだ生存しておられる卒業生の中に、同志社の建学の精神を具現したような生き方をしている方が結構いらっしゃるわけです。それらの方々なら学生も親近感もちやすい。もちろんイメージもしやすい。こちらが精神論を振りかざす必要もない。

ということで、それらの方々を通して同志社を表現しようと思ったわけです。そこで企画したのが、今も同志社大学通信『OnePurpose』で継続中の「同志社人訪問」です。「同志社人」と命名したのは、現役の学生諸君に「君たちも『同志社人』として、これらの卒業生とつながっているんだよ」というメッセージを込めたつもりです。今の広報がどんな志や方針でやっておられるかはよくわかりませんが、ともかく三十年近くも続いているのです。（私はその後、広報課長に就任して朝日新聞社刊の『AERA』誌に、卒業生を通じて社会に同志社を知ってもらうために「同志社からの道」という二ページものの連載広告を企画して、さらに多くの卒業生に会うことになります。）

さて「同志社人訪問」を始めるにあたって、どんな卒業生に登場していただくかを考えました。まず、われわれに勇気を与えてくれるような人となると、やはり社会で活躍している人ということになりがちですね。いわゆる「有名人」です。しかし「同志社をよく表現する生き方をしている人」を選ぶとなると、社会で活躍している卒業生なら誰でもいいというわけにはいきません。わたしの思いからすると、名もなき人物でもいいわけです、生きざまが同志社的であれば。

たとえば、「一粒の麦」的な生き方の卒業生なら同志社的です。『一粒の麦』というのは、『ヨハネ伝』にキリストの言葉として出てきます。「一粒の麦は、もし地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」という一節です。こういう生き方をしている人は、特に神学部卒業生に多いですけど、他の学部卒業生にもたくさんいらっしゃる。やはり、同志社のキリスト教的な雰囲気の影響だと思います。「同志社人訪問」では、そういう方々にも数多く登場していただきました。

今言いましたような主旨から選んだ人びとの内、今日は時間の都合で三人の方をご紹介しますと思います。ただしこのお三方だけが同志社を代表しているというつもりはありません。他にも、同志社的だと思う方々に数多く登場していただきました。そのなかでこの三人というのは、私が企画を作ったときにどうしても外せないと考えて選ばせていただいた十数人のなかで、真っ先にお会いした人たちだからです。真っ先にお会いしたいと思ったということは、わたしの思い入れも強かったのだと思います。

これらの人びとは、今のわたしの専門分野、つまりキャリアの研究の面でも示唆に富む生き方をしておられます。お一人は、歴史の動亂に翻弄されながら、学生のときからの夢の実現を追い続けた方、もうお一人は、失敗の連続だったけれども悲観せず、失敗のなかから新しい夢をリメイクし続けた方、最後の方は、あることがきっかけで、予期しなかった人生を歩むことになったけれども、学生時代の夢をその「予期せぬ人生」のなかに生かした方です。

お三方とも、同志社とキリスト教から影響を受けていました。特に後でご紹介するお二人については、人選したときに、キリスト教に関心があるかどうかなどあまり考えませんでした。これは意外でした。影響についても、最初の方のように骨の髄までそうだったという人もいるし、あまり自分とは関係ないと思っていたのに、心のなかに知らぬ間に同志社とキリスト教が根づいていたという人もいる。しかしそのことが、その人のお仕事、あるいは人生を形作ることにつながっているという点で、偶然の共通項をもっておられました。あるいは、同志社にきたことがその後の人生に大きく影響を与えたという点で共通性があるということもできると思います。

そしてもう一つ大事なことなのですが、お金ではない何か、お金では買えないものを大切に、求め続けた人々です。特に、このことを拝金主義的な時代であるからこそ、学生諸君には知っておいていただきたいと思います。このことは同志社を解くカギの一つではないかと、私は多くの経済人にお会いした経験からも考えています。

清水安三

まず清水安三先生です。（『同志社大学通信』への登場順は先方のご都合などで、お会いした順ではありません。）『同志社大学通信』に私が書いた清水先生のプロフィールを読んでもみます。

「一八九一（明治二四年）、滋賀県に生まれる。同志社大学神学部を卒業。この時すでにキリスト教の大学を設立する夢を抱く。卒業ビクニックで奈良唐招提寺を訪れ、鑑真像の前で鑑真の一代記を聞き感動し、中国に渡ることを決意する。一九一七年に中国に渡り、飢餓の救済活動をする。二〇年に、『崇貞女子工読学校』を北京朝陽門外に設立。この学校は、日本人が中国に建てた最初の学校で、キリスト教主義により、学習と労働を行うのを特色とした。一九二六年、アメリカのオバリン大学神学部卒業。中国滞在二十八年の間に、「中国人の足を洗わせてもらう」を信条として奉仕と親善に励み、林歌子が北京で始めた社会事業施設「天橋愛隣館」の運営にもかかり、「朝陽門外の聖人」と評された。その後、魯迅、胡適らとも親交を結ぶ。経済不況で崇貞学園が経営難に陥ると、日本に渡って手芸品を行商しながら経営資金を作ったり、東南アジアはもとより、アメリカまで講演の足をのばし、募金活動を行う。敗戦により学校は接収され、一九四六年に無一文のまま帰国。サツマイモの行商をしたり、アメリカ、ブラジルまで著書を携えて『行商講演』をしたりしながら、不屈の精神で東京町田市にキリスト教主義の桜美林高等女学校を作り、現在の大学に至る総合学園に育てた。著書に、『支那新人と黎明運動』『支那革命小史』『開拓者の精神』『北京朝陽門外』『太平洋の架け橋』『中江兆民の研究』『北京清譚』など多数。

いかがですか。この経歴を聞いて、みなさんはどんな人物を想像なさるでしょうか。破格の人物であることは容易に想像がつくでしょう。実際、私もお会いした瞬間、すごい人だと思いました。今考えても、私が六十五年間で会った人の中で、飛び抜けてスケールの大きい人です。おまけに何となく愛嬌というか、ユーモアがありましたね。

また話が横道に逸れますけれど、みなさんが社会に出て仕事をするようになると、仕事がうまくいく人とそうでない人が出てきます。このことに関して、大久保幸夫さんという方が「仕事のための12の基礎力」という本を書いておられます。社会で成功するためには「12の基礎力」が必要だということなのですが、そのなかで特に、幼児期から大学を卒業するころまでにどうしても身につけておいてほしい力が、「反応力」「愛嬌力」「楽天力」だとあります。これらは仕事を遂行するための根幹になる上に、年をとるとなかなか身につかないので、大学生くらいまでに身につけておくべきだと大久保さんは言うのです。みなさんは就職や仕事には、語学や資格などの方が重要だと考えておられるでしょうが、もちろんそれらが有効でないとは言いませんが、それ以上に大事な要素があるということに注目してください。

今、私の話を聞いてくださっているみなさんは、私の話に目や体全体で反応してくれています。たとえば微笑んだり、うなずいたり。それが「反応力」です。そうすると、私は気持ちよく話すことができるわけです。自分の話を聞いてくれているなと感じると、コミュニケーションはうまくいきますが、聞いてくれないと感じるとコミュニケーションはそこでストップします。人とのコミュニケーションには、言語だけではなく非言語（ノン・バーバル）も重要で、「反応力」はコミュニケーションの基盤です。コミュニケーションが成立しないところにこれからの仕事は成り立ちません。昔の仕事は、たとえば自然や機械に向かって黙々と働くことに価値がありましたが、現代の仕事は、人間に向かって働きかけることが中心になっています。ですから「反応力」は欠かせないのです。

それからみなさん、「この人は何だか憎めないな」とか、「何となく可愛らしい性格の人だな」と感じる人とは、いい関係が結べるでしょう。それが「愛嬌力」です。これのない人は、他人から助けを得にくいでしょうね。仕事が認められたり、出世したりする人はたいてい、上司や同僚から可愛がられたり好かれたりして、支持される人です。たとえ頭がよくても、少々仕事ができても、「愛嬌力」のない人は他人から評価されにくいのです。現代の仕事は、自分の力だけではなく、コラボレーション、他人と力を合わせてやることが多くなりましたから、「愛嬌力」も大事なのです。

もう一つ、ストレスの多い社会ですから、ものごとにこだわりすぎたり、のめり込み過ぎたり、鋭敏に反応しすぎると、それがストレスになり、自分で負担できなくなります。少々の失敗で挫折してしまうのではなく、「うまくいかなかったけれど、しばらく時間をおいてまたチャレンジしよう」とか「やるだけやったのだから、うまくいかなかったのは仕方がない。また出直せばいい。明日があるさ」くらいの気持ちで臨むことが大切です。つまり「楽天力」です。昔から「運」「鈍」「根」と言いますが、「鈍」に通じるかも知れませんが、

清水先生は、この三つの能力を完璧に備えた人でした。「反応」はきわめて温かく、センシティブ。表情がまた豊かでしたね。それから、こんな巨人なのに、失礼ながら何となく「可愛い」人なのです。私のような若造を楽しませてくれるような、何とも言えない愛嬌がありました。自分を飾ったり、偉そうにしたりすることのまるっきりない人でもありました。

また、どんな苦境に遭遇しても、くじけていません。何度も苦境がありました。特に戦争が終わって、今まで中国で築いてきた有形のものをすべてをなくして「裸一貫」で日本に戻ってきます。そこから立ち上がる力です。それを「不屈の精神」と私はプロフィールで書きましたが、今なら「楽天力」と書くかもしれません。まあ、それは少し語弊があるかもしれませんが、先生の場合はどこかに余裕のようなものが感じられるのです。最悪の事態に至ってもどこかに希望のようなものを抱いておられるというか、闇のなかでも、おそらく心に光を持っておられる方だと思います。おそらく神さまを信じておられるのでしょう。それも「楽天力」の一種だと思います。

ともかく、三つの要素が完璧に備わった見本のような方でした。と言っても、子供のときは劣等感にさいなまれたそうです。

先生は滋賀県では昔からエリートが集まる膳所中学（今の膳所高校）のご出身です。秀才ばかりのなかで、勉強の面でずいぶん悩まれたそうです。そんなときに、たまたま教会で新島先生の信仰の深さの話を聞いて感激して、人生は勉強だけではなくと確信したそうです。そして、やっぱり新島先生が作った同志社に進学しようということになった。

当然、新島先生の生き方を生きているのが目標です。「将来、キリスト教主義の大学を設立するのだ」と神学部の子友の前で宣言したら、友人たちにグラグラと笑われたそうです。しかし「何を笑うか」というわけです。「新島先生はラットランドのアメリカンボードの年次大会で、日本にキリスト教主義の大学を建てると言われて、こうして実現されたではないか」と。

事実、桜美林大学図書館前には、「大学設立こそは少（わか）き日に新島襄にうけし夢かも」と刻んだ碑がたっていました。

もう一つ、学生時代に転機があります。神学部の卒業ハイキングで奈良の唐招提寺を訪ねたことがあったそうです。そこで鑑真和尚の一代記を聞かされるわけです。

鑑真和尚はみなさんご存じですね。七五三年に中国の唐から渡来して日本に初めて戒律を受けた高僧です。井上靖の『天平の鰲』に、唐に留学した栄叡や普照などの若い僧が日本で戒律を授けてくれる高僧を探す二十年あまりの苦闘が描かれています。栄叡らは鑑真に会い、渡日を懇請します。最終的には、鑑真は日本に行くことを決意するのですが、何といっても玄宗皇帝もその才能に感服するほどの名僧です、出国は難しい。弟子たちも鑑真が日本に行くことを阻止しようとする。日本のような地の果て、しかも文化の遅れた国に先生を行かせるものかというわけです。当時の船で日本海を渡るのは至難でした。たとえば唐へ渡った日本の若い僧のなかで、日本に帰還できたのは普照ただ一人であったということからも、命がけであったことが伺えます。しかし鑑真の決意は変わりませんでした。渡日を六度試み、五度失敗しています。政治問題や船の難破など、不幸が次々に鑑真を襲います。その過程で健康を害し失明もしています。それでも日本に仏の道を広めようという決意はくじけません。そして苦節十一年、六度目によりやく渡来、聖武天皇や孝謙天皇に戒律を授けたことはみなさんもご存じのとおりです。

この話を聞いて、清水先生はたいそう感激したそうです。鑑真の生きざまと新島襄のそれとが完全に先生のなかで重なったということです。新島先生も命を賭して日本を脱出した。それは遅れた日本を救いたいという、やむにやまれぬ情熱でした。鑑真和尚が日本のためにそれほどのことをしてくれたのなら、今度は自分が命を賭して中国のためにがんばらなくては、と清水先生は考えられた。それが新島先生の教えにも応える道だと。ですから中国に渡ってまずやったことが、飢餓の救済活動です。このあたりは、一攫千金を求めてその後中国や満州に渡った人たちとは対照的です。学生諸君には、こここのころを学んでもらいたいです。つまり「己を虚（むな）しゅうする」ことです。

余談ですが、社会党の委員長をしていた土井たか子さんにお会いしたときも、「私は、己を虚（むな）しゅうすることを同志社から学びました」とおっしゃっていました。

まあ清水先生の決意というのはスケールの大きい話なのですが、当時の大学の対応もまたスケールが大きいですよ。というのも、先生は早速、どうしたら中国へ行けるか原田総長に助言を求めます。そうしたら総長は、君の情熱に何とか協力しようじゃないかというわけです。そしてクリスチャンビジネスマン数名の名刺に紹介状をつけて、「ここへ行って月に十円ずつ寄付してくれと頼み」と言われたそうです。原田総長もすごい人ですね。その時の十円が今の何円かは知りませんが、それが実現するので、大学の社会的な位置づけが、今とは比べようもないほど高かったのでしょう。

いよいよ中国に出発というときに、原田総長から紹介された本学の先輩、萬年社社長、高木貞衛に連れられて、朝日新聞社に挨拶に行きます。社会部長が会ってやろうということになったのは高木社長のお願いだと思いますけど、何と言ってもそのときの朝日の社会部長は、高名なジャーナリストの長谷川如是閑です。その長谷川のインタビューに先生は、「三十代には小学校を、四十代には中学を、五十代には高等学校を建て、六十代には大学を設立するつもりである」と答えて、それが写真と二段抜き記事で朝日新聞に掲載されたそうです。

そこから「ほらふき」、「ホウ安」とあだ名されるようになったそうですが、先生は、「自ら吹いたホウを実現するために、どれほどの苦労したことか」と冗談をおっしゃっていましたけれど。実際、戦争という運命に翻弄されながら、それでも夢を追い続けられた。それは、死を賭して夢の実現に生きた新島先生と鑑真和尚の思いが心のなかに焼き付いていたからだ、ということなのです。

清水先生はいつも卒業式の式辞で、「君らのなかにも成績のふるわないまま卒業するものいるだろう、ビリで卒業するものいるだろう。しかしそのときに、自分がもっている夢がつぶれてしまうようじゃ、ダメだぞ。学校の点数なんてものは、学校のときに七十点はとらなあかんというんじゃない。卒業しても上がるモンなんじゃ」というようなことを言われるらしいです。清水先生らしい言い方です。桜美林大学の職員さんにお聞きすると、卒業生はそれでずいぶん勇気づけられるといえます。

わたしはインタビューの最後に必ず、絞り切り型の質問をすることになっています。つまり「同志社で学んでよかったことは」という類の質問です。そうすると、「やっぱり新島先生ですな」と、間髪を入れずに答えられました。「先生は、夢というものを死ぬまで捨てなかった。そういう壮図を最後まで貫き通した先生に、わたしは大きな影響を受けましたな。それでわたしは、自分がいろいろ迷ったときには、京都へ行って、どこへも立ち寄らずに、若王子山へ登って、先生の墓前でお教えを乞うのです」。

若王子山のお墓の前で、新島先生の教えを乞う清水先生の姿が目に見えます。

この清水先生は、われわれにはちょっと大きすぎる人かもしれませんがけれども、しかし夢なら誰でも持てます。みなさんもぜひ、大きい夢を持ってもらいたいと思います。

髙文也

ということで、次にわれわれに近いというか、その当時の「時の人」をご紹介します。ある意味では、どこにでもいる「田舎のおじさん」という感じもあります。酒飲みですしね。たつぱりと自然の匂いのする人です。それは髙文也という人で、徳島県の吉野川の上流に沿った山あいの小さな町にある池田高校の社会科の先生です。

髙先生と言っても、今の学生諸君はご存じないかもしれませんが。しかしその当時、「池田高校の監監督」と言えば、高校野球に関心がない人にもよく知られた名監督でした。スポーツ特待生などない山奥の公立高校の十一人（それだけしか部員が集まらなかったからです）の素朴な選手を率いて、初出場の甲子園で準優勝し、「さわやかイレブン」と愛称され日本中を感動させました。その経験を生かして強力打線を作り上げ、何度か甲子園を制覇したわけですが、髙先生の指導する野球は「山びこ打線」と全国から恐れられたように、素朴で豪快な打撃が特徴で、勝つためにコセコセと作戦を弄する近代野球に強烈なアンチテーゼを示しました。「攻撃は最大の防御」と考えられて、「攻めて攻めて攻めまくれ」を旗印に「攻めダルマ」と呼ばれたりしました。本当にダルマさんそっくりの風貌でした。その素朴な野球で、何回か日本一になったのですから、今で言うと、髙先生と選手たち全員が「ハンカチ王子」みたいなものでしたね。

その髙先生は、一九四六年、太平洋戦争の終わった次の年に、本学の経済学部を卒業しておられます。東京六大学で野球がやりたくて、東京の某大学を受験しましたが、失敗して本学に入学したそうです。

「それほど東京の大学が希望だったのなら、同志社になじむのに時間がかかったでしょう」と聞きますと、「そないに時間はかからなんだ。同志社に来たんじゃけん同志社を好きにならんと損じゃけん。いつまでも失敗したことを悔やんでおてもうちあかんけん」と、徳島弁でおっしゃいました。

そんなふうに、ものごとを前向きに考えるのって、いいと思いませんか。

話がまた横道にそれますが、あるとき、日本を代表する信託銀行の人事課長さんが私のところに挨拶に来られて、おもしろいことをおっしゃいました。

「私は面接で、『自分の大学をどう思いますか』と学生に聞くようにしています。同志社に来てよかったと答えたらOK。もしも『本当は京大に入りたかった』と答え、その思いを同志社での三年間で克服できていない学生なら、少々頭がよくても即刻、落とすことにしています。なぜかという、ウチに来てもらっても結局、『東京海上に入りたかったのに』と思いつづける可能性が高く、そういう思考特性の人間はいい仕事ができない傾向があるからです。本当は別の人と結婚したかったのにと思いつづけていたら、いつまでたっても幸せになれませんかね」と。

最近の若者は、「自分にはこれしかない」と思うってしまう傾向が強く、それ以外の会社や仕事を受け入れられないようなところがあります。ですから大卒者でも、就職して三年間で三割五分くらいが辞めると言われています。本当は、しばらくやってみないと、自分に合っているか、合っていないかなんてわからないのですね。自分がたまたま出会った現実を受け入れて、そこに自分の可能性をかけてみるということができないのです。企業はそういう、すぐに「やめた」となりそうな若者を採用してしまうのを避けるために、今の人事課長さんのような質問やエントリー・シートなどのテストを使って、応募者の思考特性や行動特性を調べるのです。要するに、少々自分の思いとは違っても、しばらくここで全力を尽くしてやってみよう、と前に踏み出すことによって可能性が生まれるのです。自分に合っていないと思っていた仕事も、意外と合っていることを発見できたりするのです。もちろん、やってみてどうしても合わない場合は、方向を変更したらいいでしょう。それでも遅くはありません。しばらくがんばったことは無駄ではなく、必ず次のステップにつながります。キャリアの研究では、「最低必要努力量」と言ったりします。「石の上にも三年」という昔のことわざにもあります。

そういう意味では、薦先生は自分の現実を受け入れることがたいへん上手です。失敗してもその現実を受け入れよう、そしてその現実のなかで自分を最大限に発揮しようという姿勢です。それがマイナスをプラスにひっくり返す力になるのでしょう。

先生は本学を卒業後、プロ野球「東急フライヤーズ」（現在の「日本ハムファイターズ」の前身）に投手で入団されます。しかし一生懸命にやっただけでも、これもあまりうまくいかなかった。一勝もあげられないまま廃業することになるのですが、ここでも立ち直りは早く、「しゃあない（しかたがない）。またやり直しや」となるのですね。「楽天力」があるのでしょうか。それも「同じやり直すからには、ちょっとでも世の中のためになりたい」と考えられた。そこから発想したのが、故郷に帰って高校の先生になろうということです。そうしたら、今までやってきた野球で子どもたち（高校生）を育てられる、というわけです。

なぜ高校の先生になろうと思われたのですか、と質問すると、「山田先生と児玉先生がやさしかったけん。学生時代に、あんな先生になれたらええなと思ったこともあったしな」とおっしゃいました。本学で山田貞夫、児玉実用両先生にずいぶん面倒をみてもらったそうです。そのことが心に残っていたのですね。それで、できればあんな先生になれたらいいなと思ったそうです。

そして池田高校に赴任すると、すぐに野球部をつくります。しかし山村の公立高校です。部員も十人がやっとで、これも二十年間くらいはほとんど負け続けです。しかし失敗しても、神さんに恥ずかしくないような練習や試合をしようと考えていたといいます。「負けるということが不名誉であるという考えは全然持たなかった。負けることによって人間がダメになったり、やる気がなくなるならば、その方が不名誉じゃと考えた。負けてもまた一からやり直したらええ、という気持ちになることが大事じゃわな。成功というのは失敗したモンだけが到達できるの特権じゃけん」とおっしゃるわけですが、ともかくこういうコセコセしないところは、何だか清水安三先生を彷彿とさせて、まことにとって同志社のだと私は思うわけです。

もう一つご紹介したいのは、薦先生は自宅に大きな食堂を作って、何十年も野球部の生徒の食事の面倒をみておられました。もちろん食事を作るのは奥様です。奥様によると「全部、ウチの子供みたいなもんですけん」ということでした。先生にそのことをお伺いすると、「ワシは野球に育てられたけん、野球にお返しするのが自然。要するに奉仕ですわ」と言われました。お金に執着しないこういう生き方というの、またいいものでしょう。

インタビューの最後の、いつもの紋切り型の質問「同志社でご自分が得たものが具体的にありますか」ですが、先生は次のように答えられました。「同志社大学に、キリスト教的な考え方があったことが非常によかったね。そりゃ、チャペルの時間（チャペル・アワー）は出席がきびしくてしんどかったけん、押しつけがましくなかったのがよかった。子どもの野球のなかにも、ある程度、宗教的なものを教えなあかんです。何をするときもそうやけど、一所懸命やって、そのあとは神さんにすがるしかないという気持ちにならんとあかんわな。そう思えるのも、同志社で教えられた宗教的な考え方がどこかに身についていると思ったりするけん」と。

当時のチャペル・アワーは出席を取ったのです。まあ、薦先生とキリスト教というのは、意外な組み合わせだと思いましたが、「大地のぬくもり」のような薦先生の野球のやり方を考えると、なるほど、と思います。そして給料を生徒のために使ってしまうという、薦先生流に言うところの「奉仕」というのも、キリスト教的な考えが先生の身体のだどこかに残っていたのだと思います。清水先生も「奉仕」という言葉を何回か遣われましたが、自分が生かされていることを他人や社会に感謝してお返しするという思いがあるのでしょう。

松居 直

最後にご紹介するのは、児童文学書や童話の出版で有名な福音館書店の当時の社長、松居 直（ただし）さんです。学生時代は、学問の道で生きていこうと考えておられたということで、出版社を創業しようなどとは、お考えではなかった。抱いていた夢とは全く違う人生を送ることになるわけですが、それでもその人生と、学生時代から抱いておられた夢とを合体させておられるわけですから、そういう意味では、前のお二人と共通するところがあります。松居さんのキャリアを解くカギは、「予期せぬ出来事」にあります。それが何か分からないと、どうしてこの分野に進まれたのかが理解できない。インタビューでも、どうもそこらへんを避けられるというか、ボカされるので、なかなか核心に迫られません。そこで、その「予期せぬ出来事」のことを話していただかなければ、なぜ児童文学の専門家になられたのかわからない、と単刀直入にお聞きしました。

一呼吸おいてから、松居さんが微笑みながら、静かに学生時代を回顧するかのように語ってくださいました。それで、ようやくすべてが分かったと言うわけです。

大学四年生の時、松居さんは恩師の岡本清一先生（政治学）から、大学院に残って学問の道に進むよう言われていたそうです。松居さんも勉強は好きだったので、そうしようと思っていた。

ところが人生というのは何が起るかわからない。そこがまたおもしろいところですが、友人に同じ同志社で学ぶ女子学生がいました。金沢から来られた女性で、クリスマスに金沢に遊びに来ないかということになったそうです。そこで松居さんの言葉によると、「フラフラとついて行った」のですね。彼女のお家は、町の本屋さんでした。そこで、彼女のお父さんにいたく気に入られるわけです。ここが人生の転回点です。

わたしは松居さんに二度お会いしていますが、どちらかというと物静かな、「思索の人」という感じの人です。自分の考えを押しつけるようなところがない人でもありません。静かな語り口のなかに、心の広さ、やわらかさが感じられ、しかも言葉のひとつひとつに深い意味が込められている人。しかも大変な実行力のある人。わたしは松居さんを思い出したばいいつも、すばらしい人だなと思います。もちろん学生時代から、人格・識見とも第一級の人物だったでしょうし、彼女のお父さんでなくとも、ほれほれしたでしょう。

お父さんから「本格的に出版をやりたいので、片棒担がないか」と提案されたのが、二回目に金沢に行ったときです。松居さんは、お父さんも三人のお兄さんも戦争で亡くしておられます。当然、お母さんは金沢へ行くのに猛反対されたそうです。まあ出版と言っても、松居さんも彼女のお父さんも夢はあるけれども、出版に関しては素人です。前途多難な冒険であることは確かです。もちろん、岡本教授からも叱られますよね。しかし悩んだ末に、金沢行きを決意します。

まあ人生には、このようにAとBとどちらを選ぶかという大問題に遭遇することがしばしばあることを、学生諸君は知っておてください。後悔しないために、信じる方の道を選ぶのもいいとは思いますが、必ずしもそれが正解というわけではない。それが人生というものです。不利だと思った方の道を選んで、結局はそれが正解であったということは、いくらでもあります。要するにどちらを選んでも、一生懸命にやれば何とかなる。選んだ道がどうしてもダメだったら、大回りしてまた元に戻ればいい、くらいに考えてください。

松居さんをして、学者の道ではなく、あえて冒険の道を選ばしめたのは何だったのでしょうか。彼女のことを好きだった。これは確かでしょうね。その後、お二人は結婚されたのですから、これは当然でしょう。「好き」と言っても、昔ですからまったくのブラトニックなものでしょうけどね。松居さんより相当年下の私の時代でもそうでしたから。

しかし彼女を好きであったという問題だけではなかったでしょう。それだけなら、結婚するにしても、彼女が京都に来ればいい問題です。だからもっと大きい理由があった。私はお話を伺いしながら、彼女のお父さんが抱いていた夢と、松居さんが抱いていた夢がそこでスパークしたのだと確信しました。

彼女のお父さんはクリスチャンで、町の小さな小売書店を営んでおられました。そのお店の名前が「福音館」なんですね。「福音」というのはキリストの教えのことです。お父さんは小売りの本屋さんではなく、いつかは世の中のためにいい本を出版したいという夢をもっていました。一方の松居さんは、本学では「ユネスコ・クラブ」を作ったり（入学が終戦の翌年ですから、やはり世界の国々を知って、そして世界の人のびとと仲良くしたいと渴望していたとのこと）、「ロマン・ローラン研究会」をつくったり、相当活発な活動をしておられたそうです。特に「ロマン・ローラン研究会」は今江祥智氏（後の童話作家）や森本達雄氏（後のインド文学者）など錚々たるメンバーが揃っていたそうですから、相当レベルの

高いクラブだったでしょう。このような活動からも分かるように、文学とか教育とか世界平和などに相当深い関心を持っていたわけですね。おまけに絵画に極めて造詣が深かった。そこに彼女という、いわば触媒が現れた。そして、松居さんとお父さんという二つの夢を結びつけた。まったく予測をしていなかったような転回のエネルギーがそこに生まれます。

まあそれからの道が険しかったことは想像に難くないでしょう。戦後の混乱期ですしね。しかし恩師の岡本先生からは「金沢に行くなら、中途半端に帰ってくるな」と言われていますから、歯を食いしばってがんばったのでしょう。一番支えになったのはやはり、いい本を、特にこれからの時代を担う子どもたちのための本を出版したい、そして世界の平和に貢献したい、という一途な夢だったでしょう。

私がお会いしたときは、松居さんはすでに福音館書店を日本有数の出版社に育て上げ、経営者としてもご活躍でしたが、作家としても、編集者としても極めて有能でした。ご自分の作品も多いですが、特に多くの児童文学作家を育てられた功績が大きいと思います。その当時絵本さし絵画家として第一級とされた、瀬川康男、赤羽末吉、安野光雅、加古里子、田島征三、いわさきちひろなどは、皆、松居さんが発掘した作家です。

それと松居さんと言えば忘れてはならないのは、国際的なご活躍です。松居さんという人物を最も物語っているのがこれらの活動だと思います。一九六七年以来、チェコで「世界絵本原画展」（B I B）が開催されていますが、発起人は松居さんです。さらに特筆したいのが、ユネスコ・アジア地域共同出版計画の指導者としての献身的な努力です。これは世界各国から高い評価を受けることになります。このあたりからも、松居さんが単なる経営者ではないということがご理解いただけたと思います。

ユネスコ・アジア地域共同出版計画のことをご紹介しますと、今は松居さんらの努力でもう少し改善されていると思いますが、三十数年前のインタビュー当時の地球上には、絵本の存在しない国がいくつもあったそうです。まず、文字がない地域がある。絵本を作るような良質の紙もない。印刷技術も低く、もちろん金もない。したがって絵本なんかできない。できるとすれば、せいぜい藁半紙で作れる教科書くらいです。しかし逆に、そういう国には豊かな昔話がたくさんあります。それは人類の宝です。松居さんはその豊かな昔話を、絵本のない国々の子どもたちにも見せたいと思うわけです。その思いが、ユネスコの活動としてアジアの子どもたちのための共通読み物を作ろうという提唱に発展します。

不可能に近い、労だけが多く何の得にもならないように見える行為です。成果を「カネ」と考える普通の経営者ならやらない。でも松居さんは、そもそも福音館を始めたこと自体が、子どもにいい本を作りたいという願いでした。「世界の人々のために」というのは、学生時代のユネスコの活動そのものです。つまり学生時代の夢への再挑戦です。

公用語がいくつもある国もあるのです。その当時、シンガポールは四つ。だから四つのエディションを出さなければならない。インドは英語を入れると一五。スリランカは二つ。そういう言語の問題にぶつかる。

パキスタンにチベット系の人が住んでいるのですが、ウルドゥーみたいなベルシャ文字はありません。言語も違います。その人びとにどの文字で表記したらいいか。国としてはパキスタンの言葉で表記せよということになる。しかしそれでは、言語を押しつける形になる。日本語がアイヌの人びとの言語を剥奪するのと同じ構造です。日本が昔、朝鮮の人びとにやったことでもあります。そういう民族と言語の問題に松居さんは直面されます。一冊の絵本を作るということは、非常に困難を伴うんですね。しかしイデオロギーよりも子どもの幸せを考えて、根気強く妥協点を見出さなければなりません。松居さんの努力は筆舌に尽しがたいものがあるわけです。

それからもう一つの難題は宗教の問題です。緑色をたくさん使くと、緑色は神様の色だから困るとアフガニスタンの代表が言うとか、犬小屋が出てくると、犬が家に住んでいるのはいけないという国もあったそうです。回教圏では、犬は不浄の動物ですから飼いません。日本の昔話に、大工が天に橋を架ける話がある。しかし、天には神様しかいないので、子どもたちにどう説明していいかわからないから困るという国もある。そういう問題一つ一つを根気よく解きほぐしていくには、大きなエネルギーがいるわけです。

この計画は大変な努力の末に完成するのですが、複雑な文化と宗教と言語が入り乱れたアジアの民族が寄り集まって意見をまとめることができたということが、ラテンアメリカやアフリカやアラブの国々に勇気を与えます。「世界中で共同出版をやろうという気運が生まれ始めているのです」とおっしゃったときには、松居さんは嬉しそうな顔をされました。

時間もありませんから、そろそろ結論に持っていかなければなりません、この三人の話を聞いて、みなさんはどんなことをお感じでしょうか。私はあえて、これらの話を整理しません。みなさん一人ひとりが「自分にとっての同志社」を考えてください。そしてその同志社との出会いを大切にしてくださいと思います。

ただお願いがあるとすれば、「この人たちは特別であって、自分たちには関係ない」とは考えないでいただきたい。それが私の願いです。特別でも何でもない。学生時代はおそらく、みなさんと同じような学生だったと思います。キャリア論の格言に、「自分の過去は変えられないが、未来は変えることができる」というのがあります。ぜひ学生時代に夢を、それもこんな会社に入りたいとか、こんな家に住みたいとかというちっぽけな夢ではなく、できれば大きな夢を持ってください。そしてどんな道を選んだにせよ、決してその夢を捨てないで、その夢で自分の未来を描きかえていていただきたいと思います。

もう一つだけ希望を言いますと、同志社にきたからにはキリスト教に触れていただきたい。今日ご紹介した三人の方々も、同志社でキリスト教を何らかの形で吸収されました。同志社のキリスト教は、新島先生もミッションスクールになることを拒否されたくらいですから、キリスト教徒を強要するようなものではありません。原理主義的でもありません。私もキリスト教からいろいろなことを学びましたが、信者ではありません。今日ご出席の、私もぜひいろいろなことをお教えいただいた井上勝也先生は、若いときからずっと教会にも行っておられますし、誰がみてもクリスチャンなのですが、実際は信者にはなっておられないと伺っています。ですから広い気持ちで、「徳育の基本」としての本学のキリスト教に接してもらいたいと思います。それは必ず、みなさんに希望を与えてくれると思います。

理事の選挙のときなどに、「クリスチャン条項は廃止すべきだ」と言う教職員がいます。その方が、大学間競争力がつくと思っておられるようなのですが、私は、それは逆で、ずいぶん短慮な思いこみだと感じますね。昔、広報課で卒業生に「同志社とは何か」というアンケートをお願いしたことがあります。経済評論家の木村孫一郎さんが、「キリスト教精神がなければ同志社は生ける屍」と書いてくれたことが印象に残っています。

最後に、松居さんにもいつもの紋じり型の質問をしましたので、その返答を読ませていただいて終わりとします。

「振り返ってみて、僕は同志社から三つ位、影響を受けたと思います。

その一つはアメリカの文化だということです。あの頃、占領軍がいました。僕はそこのオフィスクラブでボーイのアルバイトをしていました。ものすごい政治権力で、これは反発しますよ。ところが、同志社の中に別のアメリカがありました。信頼出来るアメリカが。それがとても大切だと思うのです。プロテスタンティズムのアメリカですよ。このアメリカには新島襄も繋がっているのですね、キリスト教にも。これは僕にとって大きな体験であり、収穫でした。そういう良質のアメリカは、もしも僕が同志社以外の大学に入っていたらつかめなかったでしょう。

それから聖書です。聖書の言葉にぶつかったことは大きかったですよ。もともと熱心な仏教徒の家に生まれ、現在も仏教に親近感は持っていますが、聖書からはかけがえのないほど大きなものをもらっています。

それからもう一つは、もちろんユネスコのこともありますけれども、新島先生の遺言に、『学生を鄭重に扱え』というのがありますでしょう。僕はそうされたと思います。岡本先生でも、田畑（忍）先生でも、僕はやっぱり丁寧に取扱ってくださいと、今でも思っています。これはありがたいことだったと思います。ですからもし、僕が間接的に今の同志社に批判があるとすれば、それが今もありますかってことです。もちろん、学生の方にも問題がありましようから、一方的に先生方とか学校の在り方とかを批判は出来ないと思いますが、僕らの時にはそういったものがあつたのですよ」。

二〇〇七年六月十三日 同志社スピリット・ウィーク「講演」記録